

Royal College of Art, Design Interactions (RCA DI) の修士課程に所属している牛込陽介です。技術革新や社会問題を議論するための作品制作や研究を、クリティカルデザインという手法を用いて行なっています。

今回は、卒業制作となる「Commoditised Warfare」とその制作過程を紹介します。



<http://work.ushi.ws/Commoditised-Warfare>

#### プロジェクト概要：

人類の間にある慢性的な争いを解決する手法として、カスタムメイドのスポーツ/セレモニー/テクノロジーが戦争行為を代替する形で導入される仮想世界を表現するプロジェクト。それぞれのイベントは、スタジアムや使用するデバイスとともに、参加する国々の文化的・地政学的な特徴から特別にデザインされ、市民の熱狂を促進するスペクタクルとして機能している。争いとそれにまつわるデザインは、模型とグラフィックパッケージの形をとって表現されており、現在まで、北朝鮮vs韓国+日本+アメリカ、インドvsパキスタン、フォークランド紛争が例として示されている。

#### プロジェクトの狙い：

プロジェクトの第一の狙いは、鑑賞者に「この世界の戦争行為がどれほどばかばかしく作られデザインされているか」また「どれほど無頓着に私達がそれをスペクタクルとして消費しているか」という問いを考えさせることである。一つ目の問いを念頭に、スポーツやスタジアムは意図的に非経済的で非合理的にデザインされている（シンクロナイズド・ベースボールというスポーツや、デコトラ上での握手セレモニーなど）。このアプローチは、デザインの印象と、戦争行為に投げられる膨大な経済的・人的リソースとのバランスをとるためのものであり、こうして示されたオブジェクト群が奇妙で印象的であることが狙いである。模型とパッケージデザインというフォーマットは、コンセプチュアル・プラクティカル両方の理由で採用さ

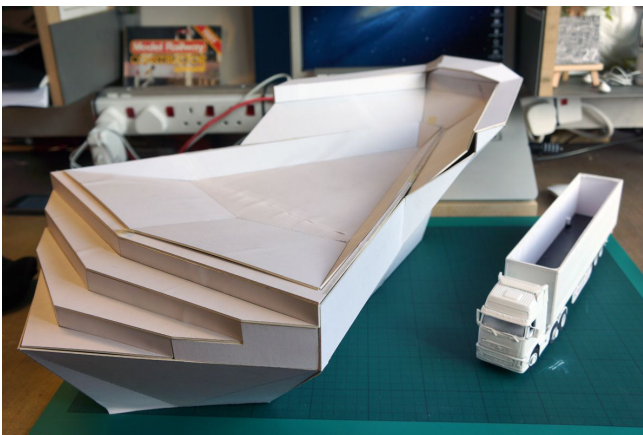
れている。コンセプトには、この仮想世界の中の住人がデザインされたスポーツやセレモニーを最終的に消費する形であり、プラクティカルには、複雑で深い物語や議論へ鑑賞者を導入する役割を果たしている。

### 卒業展示までのプロセス：

上の写真は、2013年1月の中間展示の様子です。6月の卒業展示では、模型のデラックス版という位置づけで、電気じかけの模型群を展示する予定です。これは、プロジェクトの「スペクタクル」な側面を強調するためでもあり、また私のプロトタイピングスキルを活かすためでもあります。以下は制作過程の写真です。



展示する模型の縮尺をチェックするためのスタディ群です。異なる縮尺の模型が同時に展示されるため、その状態をシミュレーションしてみています。また、単純に存在感の比較や、わかりやすさなども検討しています。



縮尺を決定した後の、ペーパーモデルです。動きや機構のテストをするためのプラットフォームとして制作しました。

その後の制作過程は <http://www.ushi.ws/blog/> でみることができます。